第５課　旧約聖書の信仰

【暗唱聖句】

「キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださいました。「木にかけられた者は皆呪われている」と書いてあるからです」ガラテア3:13

【今週のテーマ】

【日曜日・物分かりの悪いガラテアの人たち】

「ああ、物分かりの悪いガラテヤの人たち、だれがあなたがたを惑わしたのか。目の前に、イエス・キリストが十字架につけられた姿ではっきり示されたではないか」ガラテア3:1

物分かりが悪いとは、全く考えていない、思慮がないとかなり強い調子でパウロは語っています。それはまるで魔術師に魔法をかけられたかのように、「だれがあなたがたを惑わしたのか」と言います。確かに、彼らの背後には悪魔がいて惑わしていたのですが、それにしても「目の前に、イエス・キリストが十字架につけられた姿ではっきり示された」、つまり救いの根源であるキリストの十字架における贖いが、目の前にはっきり描かれるような素晴らしい経験をしているのにも関わらず、それがわからなくなってしまうとはどういうことかどパウロは驚きを隠せません。

「あなたがたに一つだけ確かめたい。あなたがたが“霊”を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも、福音を聞いて信じたからですか。あなたがたは、それほど物分かりが悪く、“霊”によって始めたのに、肉によって仕上げようとするのですか。あれほどのことを体験したのは、無駄だったのですか。無駄であったはずはないでしょうに……。あなたがたに“霊”を授け、また、あなたがたの間で奇跡を行われる方は、あなたがたが律法を行ったから、そうなさるのでしょうか。それとも、あなたがたが福音を聞いて信じたからですか」ガラテヤ3:2～5

パウロは初めてキリストを信じる信仰に入ったときのことを思い出させようとします。それは聖霊を受けたときの経験でした。彼らが聖霊を受けた経験とは、あれほどの経験とパウロが表現するほど素晴らしい体験であり、彼らの間には信じられないような奇跡が続出しました。聖霊を受けることができたということは、神の子として神様から受け入れられている証拠であり、それは救われている印でもありました。そして、このような素晴らしい聖霊体験、福音を信じたからであり、決して自分たちが律法を行ったからではありませんでした。ところが信じることによって開かれた霊的な世界を、律法を守ることでさらに深めようとしているのです。

なぜ、このようなことが起こってしまうのでしょうか。考えられるのは、聖霊の力は永続するものではなく、日々キリストとの関係を深めていかないと、徐々に無くなってしまうということです。愚かな乙女のたとえのように、聖霊の油は切れてしまった状態です。すると、聖霊の恵みがわからなくなり、後に残るのは義務的な律法ということになってしまうということです。

【月曜日・聖書の基づいて】

「聖書は、神が異邦人を信仰によって義となさることを見越して、「あなたのゆえに異邦人は皆祝福される」という福音をアブラハムに予告しました」ガラテヤ3：8

パウロはこれまでかつてエルサレムに上京した際に語ったことや、ガラテヤの人たちの個人的な聖霊体験から、信仰によって義とされることを説明してきましたが、３章においては、聖書に書かれてある言葉に基づいて、信仰による義とされるという主張を展開していきます。ここで聖書と言う場合、旧約聖書を意味しています。というのも、ガラテヤの手紙が書かれた時点では新約聖書はまだ存在していなかったからです。ちなみに、四福音書の中で最も古いとされるマルコによる福音書が書かれたのは、ガラテヤの手紙が書かれてから１５年ほど経った後のことで、パウロが亡くなった後のことでした。

パウロは旧約聖書を神様の生きた言葉とみなしています。第二テモテ３：１６で「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ」たと書いていますが、この「神の霊の導きの下に」と訳されているギリシャ語は「神が息を吹き込まれた」というのが直訳です。パウロは旧約聖書の言葉は神様が直接語られたものだということによって絶対的権威を与え、イエス様が約束されたメシアであることやクリスチャンの生き方などを、この旧約聖書の引用から教えることで、パウロ自身の教えの妥当性を証明しています。ともすると、旧約聖書は信仰よりも律法遵守を強調しているかのように誤解されやすいのですが、決してそうではないことをパウロは教えています。

【火曜日・義と認められる】

「それは、「アブラハムは神を信じた。それは彼の義と認められた」と言われているとおりです」ガラテヤ３：６

パウロは聖書から語る際に、まずアブラハムについて語られた箇所から引用しました。アブラハムはユダヤ人にとって信仰の父であり、ユダヤ人のあるべき姿のモデルとみなされていたからです。アブラハムから学べる大きな要素は、神様への服従でした。故郷を離れて旅立ったのも、息子のヨセフを燔祭として捧げようとしたのも究極の服従でした。この服従だけを見ると、行いが大切だと訴えているように感じるかもしれませんが、すべて信仰に基づくものでした。アブラハムは神様を信じて故郷を離れて旅立ったのであり、神様を信じたからこそヨセフを捧げることができたのです。その信仰による行動は、何の恐れや迷いもなかったわけではなかったことでしょう。苦しみ、悩み、祈ったことは数知れなかったことでしょう。しかし、それでも最後はいつも神様を信じたのです。

そして、それが彼の義と認められたのです。アブラハムの服従は信仰の結果であり、また義とされるために神様に服従したのではなく、信じてすでに義とされていたからの服従でした。

また、ここで使われている「義と認められた」という言葉は、法律用語の「義認」ではなく、ビジネス用語の「勘定に入れる」といった意味あいの言葉が使われています。神様はアブラハムの信仰による服従を、義にカウントされたといった感じでしょうか。信仰による服従は１回かぎりの行為ではなく、生きている限り続くものです。なぜなら、それは恵みへの応答であるのと同時に、実は神様に服従するときにこそ、人間にとっての本当の幸せや喜びが生まれるからです。

【水曜日・旧約聖書の福音】

「主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にしあなたを祝福し、あなたの名を高める祝福の源となるように。あなたを祝福する人をわたしは祝福しあなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る」創世記１２：１～３

「聖書は、神が異邦人を信仰によって義となさることを見越して、「あなたのゆえに異邦人は皆祝福される」という福音をアブラハムに予告しました」（ガラテヤ３：８）とパウロは語っていますが、いつアブラハムは福音を予告されたのでしょうか。ここで創世記１２章３節の言葉を飲用していることから、このとき交わされた神様とアブラハムとの契約を念頭に置いていることがわかります。神様がアブラハムと結ばれた契約の基礎は、アブラハムに対する神様の約束を中心にしていました。「私は～するであろう」と繰り返し語られています。一方的に神様がアブラハムにしてくださる約束ばかりで、アブラハムがその代りに神様に対して果たすことを約束している言葉はただの一言もありません。もしあれば、それは律法主義となってしまったことでしょう。アブラハムに求められたのは、ただ神様の約束を信じて受け入れることでした。

　神様を信じ受け入れるということは、自分自身に頼って生きることを止め、神様だけを頼って生きることを意味していましたので、決して簡単なことではありませんでした。しかし、神様を信じて生きるとはそういうことであり、アブラハムの物語はそのことを私たちに教えているのです。

【木曜日・呪いからの贖い】

「律法の実行に頼る者はだれでも、呪われています。「律法の書に書かれているすべての事を絶えず守らない者は皆、呪われている」と書いてあるからです」ガラテヤ３：１０

律法を守り行うことは救われるために必要なものと信じていた者たちにとって、このパウロの言葉には驚いたことでしょう。律法を遵守することが呪われている行為だとは夢にも思っていなかったに違いありません。それどころか祝福される行為だと期待さえしていたことでしょう。しかし、パウロは明快に「律法の実行に頼る者はだれでも呪われています」と語ったのでした。もちろん、律法が呪われているといっているわけではありません。律法は神様の愛の教えであり、それは素晴らしいものです。問題なのは、律法を人間は守り切ることができないということです。だから呪われているというのです。もし律法の実行に頼るなら、すべてを完全に守り切らなければならないからです。しかし、これは誰にもできないことです。だから聖書は次のように語っているのです。

「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっています」ローマ3:23

しかし、幸いなことにイエス様が律法をすべて守り、罪を犯すことなく、わたしたちの身代わりとなって十字架にかかってくださいました。ゆえに、この十字架の主を信じ、見上げて生きていくものは救われるのです。これを福音と言います。

「ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです」ローマ3:24

わたしたちのことを、キリストは贖ってくださいました。贖うとは買い戻すという意味の言葉です。キリストはご自分の命という代価を払って私たちをご自分のもとへと買い戻してくださり、呪いから解放してくださいました。このことを信じさえすればよいでしょう。